

フェイジョアーダ宗教論

中 牧 弘 允

(昭和48年修士修了)

ブラジルの代表的料理の一つにフェイジョアーダがある。これはフェイジョン豆の煮汁に牛の牛肉やソーセージ、塩漬けした豚の内臓・耳・足・尻尾などを入れて長時間ぐつぐつ煮こんだ、こってりした料理である。これを米飯にかけ、マンジョカの粉をふりかけて、コウベという野菜炒めやオレンジと一緒に食べる。サンパウロのレストランでは水曜日と土曜日がフェイジョアーダの日とされ、腹もちがいいので昼食に供される。

フェイジョアーダは、その昔、主人から提供される質の悪い肉やゲテモノを煮こんだ「奴隷料理」に起源をもっている。こうした奴隷料理はひとつの鍋を使っていろいろな材料を煮込むぐった煮に特徴があり、シンシンやカルルー、あるいはバタパなどのいわゆる「バイア料理」もこの系列に属する。たとえばバタパはマンジョカの粉に玉ネギ、ニンニク、コエントロ、ゴマ、カシュナッツ、ピーナッツ、デンデ油、ココヤシの胚乳を混ぜてどろどろに煮込み、生エビや魚の切り身を加えたうえで、フェイジョアーダ同様白飯にかけ、トウガラシ・ソースをふりかけて食べる。このバイア料理はブラジル東北部のバイア州にちなんでつけられた通称だが、「アフロ・ブラジル料理」というほうが正確かもしれない。ともかくこれは各種の材料をごたませにしたブラジル生まれのドロドロ料理であり、各々の素材は個性を失い、複合的な味覚が特徴となっている。個々の材料の持ち味を生かそうとする日本料理とは対照的に、むしろインド料理や中華料理の主流に近いと言えないこともない。

冒頭から何やら料理の話題をもちだしたのは他でもない。ブラジル人の宗教的味覚がフェイジョアーダに代表される「ごたませ料理」や「どろどろ料理」と無縁ではないと日頃感じているからである。だからといってブラジル人は「ごたませ宗

教」や「どろどろ宗教」しか好まないということではない。アメリカのハンバーガーや日本料理が好まれているように、ペンテコスタリズムや日系新宗教もけっこう受容されている。しかしそれすらもブラジルの味覚に強い影響を受けている。

サンパウロとリオを結ぶドウトラ街道沿いにアパレシーダという町がある。ここはサンパウロから約170キロの所に位置する人口3万人たらずの小都市にすぎないが、ノッサ・セニョーラ・ダ・アパレシーダを祀る大聖堂があるため、いつも巡礼者で賑わっている。聖母アパレシーダはブラジルの“守護女神”の地位を占め、アパレシーダ大祭の10月12日は国の祝日と定められている。もっともこれは1980年のローマ法王のブラジル訪問を記念して制定されたものであるが、それ以前からもメキシコのグアダルベ信仰に比肩しうる国民的信仰を集めてきた。

聖母アパレシーダは高さ約30センチの立像で、頭上には黄金の冠が輝き、頭から足元にかけて、国旗等の刺繍の入ったマントをかけている。そして忘れてはならないのは、この聖母が黒いマリアであるという点である。伝承によると、この像は、1717年の秋、近くを流れるパラíba川で魚をとっていた漁師の網にひっかかって引き上げられたという。浅草観音の縁起を思い出させる伝承だが、実際、江戸の庶民とブラジルの庶民との相違はあっても、祈願によって御利益を求める点でもよく似ている。

ブラジルでは願掛けのことをプロメッサと称し、感謝の印に奉納物を供える。1983年の大祭時に、私もこの大聖堂を訪れ、プロメッサの実態をしばらく観察する機会をえた。奉納物としては写真が一番多く、裏に祈願の内容が書かれていた。また1メートルもある細長いロウソクがたくさん奉納されていたが、ロウ細工の手や足も散見され

た。かつてはエズ・ヴォトとって、小絵馬のような板絵や手足の木彫が奉納されたものだが、今ではそれが写真やロウ細工に変っていることが了解された。興味をひいたのは、その場でハサミをとりだして毛髪を切ったり、子供の衣服を脱がせて奉納する人もいたことである。両者とも願掛けの終了を意味していた。そしてこれらの奉納品は地下の収蔵室に運ばれ、その一部は、“展示”に供される。この“展示室”の光景たるや、何とも雑然としていて、壁といい、天井といい、写真が無数にちりばめられているなかに、奉納品の手・足・義足・松葉杖・人形・貴金属・聖人像などが所狭しと並べたてられているのである。ブラジル国家公認の正統カトリシズムの殿堂は、地下室の民衆カトリシズムに支えられていた。そこには、庶民の宗教的情念がうずまいており、個々の写真や奉納品は個性を失い、何とも形容しがたい「どろどろ料理」の迫力が充満していた。黒い聖母アパレシーダに対する感覚は、どこかアフロ・ブラジル料理の味覚とつながっているようだ。

実際、ここを訪れる人の動きにも秩序はあまりみられず、雑然とした印象が強かった。何百台、何千台ものバスが大駐車場に並ぶけれども、いったんバスを出たら、すべては自由行動。引率者もなければ、旗もない。教区別、教会別の行動は全くみられない。各人気のむくままミサに出席したり、聖母像を拝んだりし、プロメッサを熱心に行っていたかと思うと、露店の買物に熱中しているといった具合である。浅草観音の縁日の雰囲気を感じばまずまちがいない。

殊勝にも私はその日、朝から晩までそこに留まっていたが、日本人や日系人にはほとんどお目にかからなかった。日系人のカトリック信者は形式的にしろ少なくないはずなのに、なぜ会わなかったのか。理由はいろいろと考えられるが、第一には、聖母像にあまりアイデンティティを感じていないのではあるまいか。なぜなら黒い聖母像は、褐色のブラジル人にとっては強力なシンボルでありえても、日系人にとっては縁遠い存在なのであろう。だからといって日系人のカトリック信者がここを全く訪れないというわけではない。実は、

大祭日とは別に、日系コロニア・アパレシーダ巡礼という企画が隔年であって、1984年には三千人の参加をみた。つまり第二の理由は、日系コロニアでまとまって参詣するという特異な形態をとるために、わざわざ混雑する大祭時にあえて出かける必要はないというわけである。そして第三の理由を付けるとすれば、第一と第二の理由と関連するのであるが、日系コロニア・アパレシーダ巡礼が象徴するように、アフロ・ブラジルの「ごたまぜ宗教」に対し、だいたい慣らされたとはいえ、今でも少なからず抵抗感を覚えているのではないかという点である。この点はまだ憶測の域を出ていないが、今後更に突っこんでみたいと思っている。

聖母アパレシーダはブラジルの民衆カトリシズムが生みだした産物であるが、ブラジル産の新宗教にもフェイジョアード的味覚は濃厚である。ウンバンダはサンパウロ州以南に勢力をもつ新宗教で、サンパウロ州内だけでも1万6000以上のグループが存在している。ウンバンダは聖母マリアをはじめ、アフリカ系のイエマンジャ、シャンゴ、オグン、ならびにインディオのカボクロ霊などを適宜に祀る、きわめてシンクレティックな宗教であるが、それは教義や儀礼の面にとどまらない。

1983年12月12日、私はイエマンジャ(海の女神)の祭りを見るために早朝サントスの南にあるプライア・グランデ海岸に出かけていった。朝日の昇る頃、祭りは最高潮に達すると聞いていたからである。プライア・グランデは大海岸を意味するが、その海岸の数キロにわたって何百とも知れぬウンバンダのグループが、それぞれの聖域を画して、思い思いに祭りを行っていた。ところが夜が白々と明けてきても、全体としての祭りはいっこうに盛り上がらないのである。それもそのはず、あるグループはイエマンジャを海に送るための行列をつくっているかと思うと、まだ盛んに踊りまくっているところもある。地面をのたうちまわる者がいるかと思えば、タバコやピンガ(砂糖キビの焼酎)をあおって、足元がふらふらしている御仁もいる。はなはだしきはまだバスが到着したばかりで、聖域をしつらえ始めているといった具合に、

全体の統率とかまとまりが全く不在なのである。もっとも、各グループはリーダーを中心に実によく統率がとれていて、この点に関する限りアパレシダ大祭の比ではなかった。しかし、グループ間の場合には、「隣りは何をする人ぞ」とばかりに互に無関心なのである。ウンバンダ協会という連合組織はあるものの、教義や儀礼の統一化はおろか、組織の秩序化もほとんどなされていない。対政府の窓口団体にすぎないという説すらある。

ウンバンダの信者は、イエマンジャの祭りを見た限り、圧倒的にアフロ系混血が多い。ヨーロッパ系は言われている程目だっただけではなかった。日系人のウンバンダ・グループも存在するというが、ここでは見かけなかった。ウンバンダを「ブラジルの国民的宗教」と形容する人類学者もいるが、民衆カトリシズムをしのぐ程の国民的で強固な基盤をもっているわけではない。国民的な基盤という意味では、これを含め、前近代の民衆カトリシズムの伝統をひく近代のシンクレティズムにこそ注目すべきであろう。そしてこの「ごたまぜ宗教」には「正統の味」が存在しない。カトリックの正統性には対抗しても、自らの正統性はまだ確立していないのである。ごった煮の味は多様に変化し、正統の味が作りにくいという道理である。

この「正統性の欠如」はブラジル文明の一大特徴ではないかと私は考えている。これは民衆カトリシズムやウンバンダに限らず、有名なカルナバル（カーニバル）にも同様なことが言える。リオやサンパウロにはエスコラ・デ・サンバという文字通りに訳せばサンバ学校というサンバグループが存在し、毎年覇を競い合っている。このエスコラ・デ・サンバの歌と踊りはグループ毎に毎年異なるだけでなく、個々人の動きをみると、勝手に踊っていることのほうが多いのである。「正

調〇〇節」とか「××流家元」とは全く無縁の世界なのである。エスコラ・デ・サンバにしてからがこのような状態であるから、あとは推して知るべしであろう。

ところで、1984年のカルナバルの一週間前に、ブラジル日蓮正宗は池田大作インターナショナル会長を招いて、文化体育フェスティバルをサンパウロで挙行了。その会場の体育館を埋めた2万人の観衆は、1時間余りにわたる分秒刻みの踊りやマスゲームに酔いしれた。カルナバルや祭りの踊りに素材をとっていたが、同じ踊りを皆で同じ様に踊るという意味で、一週間後のカルナバルの踊りとは対照的であった。また、会場を暗くし、黒装束に身を固めた男性による人文字も、実に統制がとれていて感動をよんだ。この企画と演出は、日系人がトップで掌握するとはいえ、実際はブラジル人がブラジル人を指導・指揮する形で推進された。このようにブラジル人でも統制のとれた動きができないわけではないが、それは決して主流とは言えない。

ブラジルの好みの主流は今でもごたまぜの、唯一絶対をふりかざさない感覚である。このことは日系の宗教でブラジル人の間に一番浸透しているのが生長の家であることと、決して無関係ではありえないと私は思っている。生長の家のポルトガル語の機関紙『アセンデドール』は20万部を越える発行部数をほこっている。生長の家は言うまでもなく近代日本を代表するシンクレティックな宗教であり、フェイジョアードを好む国民に広く受容されても驚くにはあたらない。決して他の要因を軽視するわけではないが、こうした感覚的視点からの分析も、今後追求する価値があるように思われる。